

Hyper Ing 2012

”Hyper Ing”は上高生を応援する先輩メッセージです。上野高校 HP→進路指導室→進路通信 でバックナンバーが閲覧できます。

上野高等学校進路指導部 vol.16 2013/1/25

文理・志望校決定特集3 大学出張講義…暮らしとことば

12月14日(金)に伊賀地方の方言を研究している大学の先生に上野高校にお越いただき、「暮らしとことば」についてお話をいただきました。講義の様子を取材しました(写真は視聴覚室での講義の様子)。



真田 信治 先生(奈良大学教授 大阪大学名誉教授) 「話しことばから考える日本語の特徴」

私たちはことばを獲得して日常を過ごしていますが、その背景についてお話したいと思います。

子どもは、生まれた時は何もしゃべれませんが、だんだん言葉を覚えていきます。例えば牛の鳴き声を聞いて子どもが「ウェーウェー」とその声を真似しました。それに対して母親が「違うでしょ、モーモーでしょ」と言ったとします。牛の鳴き声は様々に表現できるのですが、「モーモー」という言葉を覚えた瞬間、そのことばに支配されてしまう。つまりことばを覚えるということは、様々に見えていたもの切り取り、限定していくというプロセスでもあるのです。ニワトリはアメリカでは「クックドゥードゥル」と鳴き、牛は福島県では「べーべー」と鳴きます。私

たちの文化や表現方法は我々の祖先のものの考え方や感じ方を反映しているのです。

表現方法は私たちのものの考え方や感じ方を支配するという面もあります。例えば欧米の子どもは太陽を黄色く描きます。欧米では”The sun is yellow”と表現されるからです。また虹にははっきりとした色の境界はありませんから、3色、4色と表現する国もあります。それから山の子どもが海を描くときは「海は青い」ということばから青色を使いますが、海岸の子どもは様々な色を使います。何をどう見るかはその国の表現に引きずられるのです。

私は北陸の五箇山郷の出身で、勉強することは自分のふるさとを捨てること、新しいことを学習することだと考えていました。ところが大学で、方言を記録していくことが学問になることを知りました。例えば沖縄ではコウモリは「カードリ」(河鳥)と鳥の仲間と考えられています。クジラは各地でその肉を「ミ」(刺身の意味)と表現するように、魚ととらえられています。学校教育ではコウモリはネズミの仲間、クジラは哺乳類と教えられます。外国語の例ですが、アメリカ原産の植物であるジャガイモは、日本では「イモ」の範疇ですが、フランス語では「大地のリング」、北京語では「土の豆」と表現されます。

民衆文化の有り様はその表現方法の中に凝縮されています。学習とはコウモリの例のように、知識を獲得することでことばを失っていくという面もありますが、方言の研究のような学習は、先祖のものの考え方や感じ方を知り、私たちがことばに支配されていることを客観的に考えるという一面もあるのです。

中井 精一 先生(富山大学教授)

「伝統的地方都市“伊賀”の暮らしとことば」

15年前から富山大学で日本の方言を研究しています。日本語の芯をなすものは近畿のことばです。高校生が勉強する古典は基本的に近畿の古いことばです。理由はふたつあって、ひとつは文献を残しているのは京都や奈良など近畿に限られている、もうひとつは文字を書けるのは役人やお坊さんなど一部のひとたちで、そうしたひとたちが最も多くいたのは都があったところ。歴史とは「書かれたものの歴史」ですから、日本の文化や歴史の中心は永く近畿地方であったといえます。

三重県立上野高等学校

近畿は文化の厚みがある地域です。伊賀に生まれ育った人は、ここにいるうちは気づきませんが、よその土地に行くと「自分たちのところと何か違う」と実感するはず。例えば敬語です。皆さんは「いうてはる」「見てはる」など助動詞を使う敬語を日常的に使っていますが、これは近畿の表現で、標準語の敬語以上に複雑で丁寧です。一方静岡、千葉、北関東から東北、和歌山の一部から徳島、高知、宮崎にかけての太平洋沿岸は「無敬語地帯」で、助動詞を使う敬語はほとんどありません。皆さんがこの地域の人と話をすると「あっさりしている」、「失礼な言い方だ」と感じるかもしれません。また敬語だけでなく人に対する配慮の細かさも近畿に共通することです。ですから若い人からすると伊賀はやや息苦しいかもしれません。

伊賀上野は「小京都」と呼ばれ、伝統的な産業や芸能も全部揃っています。自然環境も京都と似通っているし、天神祭など京都との繋がりを強く感じます。1952年に国立国語研究所によって伊賀上野の方言、日常的に使っている表現について調査が実施されました。上野高校の新聞部や放送部も調査に協力し、その様子は上高新聞に掲載されています。

これは伊賀方言番付の試作版です(図)。皆さんほどの程度知っているでしょうか。例えば「いぬる」(帰る)は古いことばで万葉集に出てきますし、竹取物語や江戸の洒落本でも使われている息の長いことばです。「くいち」(くい違い)はさいころの目が由来で、浄瑠璃に登場する400年前のことばですが、現在はあまり使われていないので減んでいくかもしれません。このリストにある伊賀の方言は現在も使われているものですので、伊賀のことばは「由緒正しい」、歴史に裏付けられているともいえます。

次に地図を用いて方言の変化を考えましょう。伊賀のことばについて、2010年から12年にかけての調査と1971年から79年にかけての調査を比較してみました。

「台所」については、上野の中心部では40年前は近畿の「ダイコ」が多く使われていましたが、現在は「ダイコロ」が使われ、ことばの東京語化が進んでいます。周辺部で使われていた「タナモト」はほとんど使われなくなりました。「お手玉」については、40年前の「オクミ」、「オシ」などの表現が現在も残っています。「お手玉」そのものがあまりされなくなったので、新しいことばに入れ替える必要がないからといえます。

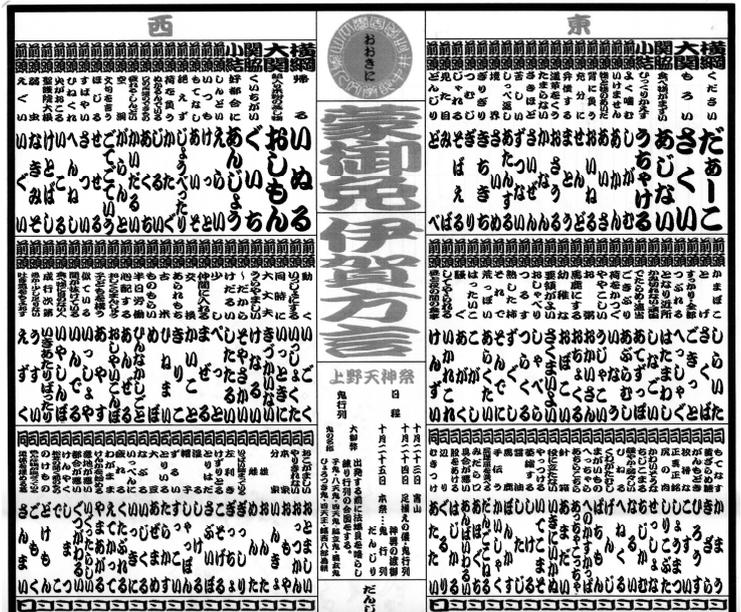
「あご」は、上野の周辺部では40年前には「おとがい」と表現していたのですが、現在では「あご」がほとんどです。ちなみに「あご」が指す部分は「あごの先」か「あご全体」かも地域によって違いがあります。「アオダイショウ」は、40年前は「サトマワリ」「ネズミトリ」など、かつて「家の周りでネズミを捕る動物」という認識からそう呼ばれていましたが、今ではネズミもいなくなって東京語に入れ替わりました。「サイモ」は、皆さんの祖父母は「サイモ」と「タダイモ」と併用していて、その40年前の世代は「タダイモ」と言っていました。みなさんは「サイモ」しか使いませんから、10年、20年後にはこの言語地図も変わるでしょう。

先ほど「ジャガイモ」の話が出ましたが、同じ外来のイモであるサツマイモは薩摩が語源で、薩摩では「琉球イモ」と表現されます。「タダイモ」は「ただのイモ」、日本古来のイモの意味なのです。このようにモノの名前から日本人のモノに対する考え方や歴史をさかのぼることができるのです。方言から日本の歴史が見えてくるのです。

「方言の研究はどのようなことに役に立つのか」という会場からの質問に対して

中井 ことばを研究するときには方言と「共通語」の両方を研究する必要があります。江戸時代までは「共通語」に当たるものはなく、「書きことば」を用いて意志の疎通をしていました。明治政府は「外国に征服されない近代国家を建設する」目的から、ことばも統一する、すなわち「共通語」(標準語)を作ります。その過程で各地の方言が調査されました。「共通語」と方言の研究は表裏一体です。また私たちはまず方言を覚え、第二言語として「共通語」を覚えます。方言の研究は私たちの文化の研究でもあります。

真田 先の講義で「ことばは祖先のもの見方や考え方」とは言いましたが、現在ことばは変化し、方言は消えつつあります。日本が一律になってしまうことはあまり好ましくありません。方言を記録することは祖先の消えゆく知恵を記録することだといえます。



大学は好きな勉強が思いっきりできる場所。興味が湧くことを探そう！

